

弥陀の本願信ずべし  
本願信ずるひとはみな  
攝取不捨の利益にて  
無上覺をばさとるなり

(二首)

釈迦如来かくれましまして  
二千余年になりたまふ  
正像の二時はをほりにき  
如来の遺弟悲泣せよ

(三首)

末法五濁の有情の  
行・証かなはぬときなれば  
釈迦の遺法ことごとく  
竜宮にいりたまひにき

(四首)

正像末の三時には  
弥陀の本願ひろまれり  
像季末法のこの世には  
諸善竜宮にいりたまふ

(八首)

無明煩惱しげくして  
塵数のごとく遍満す  
愛憎違順することは  
高峰岳山にことならず

【意 訳】

弥陀の本願（第十八願）のいわれを聞信する身となりなさい。聞信する身となったすべての人は、いま、かぎりなき光の中に摂め取られる利益をうけて、命終には、この上もないさととり（往生即成仏）を得るのです。

主釈尊がなくなられて

二千余年の年月が流れました

正法・像法に時代は終わりました

末法に世に生きる「私たち」釈尊の弟子は「末法に生きることを」深く悲泣しましょう

法・五濁の時代を生きる人々は

修行することも、証することも不可能な時代です

釈迦の説き示された教法（聖道の教法）はすべて竜王の宮に隠れてしまわれました

正・像・末の三時代において「つねに」

弥陀の本願の教法はひろまりました

像法の末より末法の今の世では

釈迦の説かれた自力諸善の教法は竜王の宮に隠れたもうたのです

無明煩惱は盛んに燃えあがり

塵のように無数にみちみちています

貪りの心による愛やいかりによる憎しみが、いろいろな状態に応じて生ずることは「大きくふくれあがり」あたかも高い峰やあるいは岳山にたどえることができます

【十六首】

自力聖道の菩提心

心も言葉もおよばれず

常没流転じょうもつるてんの凡愚は

いかでか発起ほつきせしむべき

【十八首】

像末五濁の世となりて

釈迦の遺教かくれしむ

弥陀の悲願ひろまりて

念仏往生さかりなり

【十九首】

超世無上に攝取し

選択五劫思惟して

光明・寿命の誓願を

大悲の本としたまへり

【二十首】

浄土の大菩提心は

願作仏心をすすめしむ

すなわち願作仏心を

度衆生心となづけたり

【意 訳】

この世において、自力でさとりを求める心は「実に深遠な内容であり」言葉や思いであらわすことはできません。常に迷いの世界に沈みきって流転をくり返してきた愚かな身の凡夫は、どうして「この深遠な内容をもつ菩提心を」おこすことができましようか、できないのです

像法、末法の時代、五濁の世となり

釈尊の残された聖道門しょうどうもんのみ教えは、次第に衰えてしまいました。阿弥陀仏の大悲の願いを説くみ教えは、ひろまって、「この願いにしたがう」念仏往生のみ教えは、「多くの人々が受け入れ」盛んであります

「法蔵菩薩は」あらゆる諸仏に超えすぐれた、最上の願いを攝取されて、五劫の間、思いをめぐらし、「最もすぐれた行を選びとられました」  
「その願いは」限りなき光と寿命の仏となつて、あらゆる人々を救いたいという誓いであり  
大悲心にもとづく根本の願いであります

浄土のみ教えで説かれる他力の大菩提心は「われわれに」浄土に生まれて仏になりたいという心をおこすことを勧められます。浄土に生まれて仏になりたいという心は、そのまま、あらゆる人々を仏にしたいと願う心ともあらわすことができます

【二二首】

弥陀の智願海水に  
他力の信水いりぬれば

眞実報土のならひにて  
煩惱菩提一味なり

【三十首】

弥陀の尊号となへつ  
信しんぎやう梁まことにうるひとは  
憶念の心つねにして  
仏恩報ずるおもひあり

【三一首】

五濁悪世の有情の  
選せんじやく択本願信ずれば  
不可称不可説不可思議の  
功德は行者に身にみたり

【三二首】

無碍光仏のみことには  
未来の有情利せんとして  
大勢至菩薩に  
智慧の念仏さずけしむ

【三四首】

釈迦・弥陀の慈悲よりぞ  
願作仏心はえしめたる  
信心の智慧にいりてこそ  
仏恩報ずる身とはなれ

【意 訳】

「あたかも大海に川の水が流れ込むように」阿弥  
弥仏の本願の智慧海に他力信心の川が流れ込めば

(凡夫が眞実信心の身となり、本願に生かされることを譬たとえています)

眞実報土の自然の道理によつて

煩惱はそのまま転ぜられて菩提となります

(信心の人が報土に生まれて、弥陀と同じ悟りを開くことを願わす)

阿弥陀仏の尊い名号をくり返し称えて(名号のい  
われを信じ、念仏申す)

眞実の信心を身に得ている人は

本願を信ずる(憶おもう)心がとぎれず

仏恩を報謝する思いが続きます

五濁の濁りきつた世に生きる人々が

ただ念仏一行でお救いくださいさる阿弥陀仏の願いを  
信ずれば、讚えつくすことも、説きつくすことも、

心で思いはからうこともできない。南無阿弥陀仏

の無限の徳は、念仏に聞き念仏申す人の身に満ち

わたります

無碍光仏のお言葉によれば

未来の苦悩の人々を、信の利益である浄土へ帰入  
せしめるために、大勢至菩薩に

智慧の念仏を授けられました

釈迦・弥陀の大悲により

浄土に生まれ、さとりを得るといふ大菩提心を与  
えられました。それは信心のはたらきで、智慧を  
身に得ることでもあるから、いよいよ仏恩を報ず  
る身となるのです

【三五首】

智慧の念仏うることは  
法蔵願力のなせるなり  
信心の智慧なかりせば  
いかでか涅槃をさとらまし

【三六首】

無明長夜の灯炬なり  
智眼くらしとかなしむな  
生死大海の船筏なり  
罪障おもしろとなげかざれ

【三七首】

願力無窮にましませば  
罪業深重もおもからず  
仏智無辺にましませば  
散乱放逸もすてられず

【三八首】

如来の作願をたづねれば  
苦悩の有情をすてずして  
回向を首としたまひて  
大悲心をば成就せり

【三九首】

眞実信心の称名は  
弥陀回向の法なれば  
不回向となずけてぞ  
自力の称念きはるる

【意 訳】

智慧のはたらきをもつ念仏をうることは  
法蔵菩薩の願力の成就によります  
もし信心によつて開かれる智慧がなければ  
どうして涅槃の悟りを開くことができましよう  
か、できません。

(念仏に聞き信心を得る身は、智慧の心が与えられ、必ず涅槃の悟りを開きます)

煩惱にみちみちた長い夜の闇を、阿弥陀仏のご本願は照らしてくださる大きな灯です。智慧の眼が閉ざされていると悲しまなくてもよいのです。広く深く迷いの大海を、阿弥陀仏のご本願は乗せて渡してくださる船筏です。

本願力のはたらきは、限りなくあらゆるところにおよびます。深く重い罪の行いも、本願力のはたらきによつて救われます。阿弥陀如来の智慧は、限りなくあらゆるところにおよびます。

欲望によつて心が散り乱れ、慎みのない自分中心の心も、その智慧のはたらきに摂め取られます。阿弥陀如来が本願をお誓いになられたお心をうかがうと、苦しみに満ちた人々を、どうしても見捨てる事が出来ず「大悲心にもとづく」善根功德を衆生に与えることを第一とされ、慈悲の心を満たされました

眞実信心に基づく称名念仏は  
「衆生の方より回向するのではなく」弥陀の本願によつて回向される法ですから、不回向となづけ、自力の称名念仏を嫌われます

【四一首】

造悪このむわが弟子の  
邪見放逸さかりにて  
末世にわが法破すべしと  
『蓮華面経』にときたまふ

【四二一首】

念仏誹謗の有情は  
阿鼻地獄に墮在して  
八万劫中大苦惱  
ひまなくうくとぞときたまふ

【四三一首】

眞実報土の正因と  
二尊のみことたまはりて  
正定聚に任すれば  
かならず滅度をさとるなり

【四五一首】

眞実信心うることは  
末法濁世にまれなりと  
恒沙の諸仏の証誠に  
えがたきほどをあらわせり

【四六一首】

往相・還相の回向に  
まうあはぬ身となりせば  
流転輪廻もきはもなし  
苦海の沈淪いかがせん

【意 訳】

悪を好む弟子たちは  
よこしまな見解やわがままな心が盛んで、末法の  
世に「この弟子達が」仏法を傷つけるであろうと  
「釈尊は」蓮華面経でお説きくださっています

念仏のみ教えをそしる人々は

阿鼻地獄（無間地獄）に墮ちて

そこで八万劫という長い時間、大変な苦しみを

受け続けるであろうと経典（『観仏三昧経』や『十

往生経』）に説かれています

眞実報土に生まれる正因（信心）を

釈迦・弥陀二尊のお言葉（「発遣と召喚」）により、

お勧めいただきまさしく仏になるべき身にならせ

ていただいたので、必ず煩惱の火のふきけされた

大涅槃のさとりを得るのです

眞実の信心を得ることは

末法の濁りきった時代には、まれなことであり

得ることはむづかしい「それだけに尊い信心であ

る」。ガンジス河の砂の数ほどの無数の仏さま方

が証明されています

往相も還相も阿弥陀仏よりお与えくださったみ教

えであるから、このみ教えに遇いたてまつること

がなかったならば、はてしなく迷いの世界をめぐ

りつづけ、苦海に沈みきつて、どうしても救われ

るといふことはありません

「しかしこうして遇いがたいみ教えに遇っているということは、なん

とありがたいことでしょうか」

【四九首】

無始流転の苦をすてて  
無上涅槃を期すること  
如来二種の回向の  
恩徳まことに謝しがたし

【五三首】

弥陀・観音・大勢至  
大願のふねに乗じてぞ  
生死のうみにうかみつ  
有情をよぼうてのせたまふ

【五八首】

他力の信心うるひとを  
うやまひおほきによるこべば  
すなはちわが親友ぞと  
教主世尊はほめたまふ

【五九首】

如来大悲の恩徳は  
身を粉にしても報ずべし  
師主知識の恩徳も  
骨をくだきても謝すべし

【六十首】

不了仏智のしるしには  
如来の諸智を疑惑して  
罪福信じ善本を  
たのべば辺地にとまるなり

【六一首】

仏智の不思議をうたがひて  
自力の正念このむゆゑ  
辺地懈慢にとどまりて  
仏恩報ずるところなし

【意 訳】

はかり知ることのできない過去より流転しつづけてきた身が苦しみを捨て、無上涅槃の悟りを願う身としていただくのは、阿弥陀仏の相往・還相の回向によるからであります。この大いなるご恩は、どんなに感謝してもかえしきれない恵みであります。

阿弥陀如来・観音菩薩・勢至菩薩は

大悲の願船にお乗りになつて  
苦しみ多き、迷いの大海に船をすすめ  
あらゆる人々に喚びかけつつ、願船にお救いくださいます

他力の信心を得た人が

本願のみ教えを敬い、大いに喜べば  
わが親友であると  
教主釈尊は、ほめ讃えられます

阿弥陀如来よりいただいた大悲のご恩は

〔かえしきれないご恩です〕  
身を粉にする思いで報じましょう  
釈尊をはじめとして教法をお勧めくださった善き先師  
の人々のご恩も、骨をくだく思いで報じましょう

仏智の不思議をさとることができない証拠として

如来のもろもろの智慧を疑い  
善悪の因果のみを信じ、自力の称名念仏で  
浄土に往生すると思つていますが、そうではなく辺地  
にとどまります

仏智の不思議を疑い

自力の称名念仏で救いを求めるものは  
辺地・懈慢の世界にとどまります  
そこでは仏恩を報ずるところがありません

【六九首】

本願疑惑の行者には

含花未出のひとつもあり

惑生辺地ときらひつ

惑墮宮胎とすてらるる

【七〇首】

如来の諸智を疑惑して

信ぜずながらなほもまた

罪福ふかく信ぜしめ

善本修習すぐれたり

【七一首】

仏智を疑惑するゆゑに

胎生のものは智慧もなし

胎宮にかならずうまるるを

牢獄にいるとたとへたり

【七七首】

如来慈氏にのたまはく

疑惑の心をもらながら

善本修するをたのみにて

胎生辺地にとどまれり

【八二首】

仏智うたがふつむふかし

この心おもひしるならば

くゆるこころをむねとして

仏智の不思議をたのむべし

【八三首】

仏智不思議の誓願を

聖徳皇のめぐみにて

正定聚に帰入して

補処の弥勒のごとくなり

【意 訳】

本願を疑いつつ念仏申す人は、「善導大師の『観経疏』によれば」

花の蕾つぼみにあつて出られない

また辺地へんじに生れる

あるいは胎宮たいぐに墮すると、厳しく貶けなし捨てられます

〔本願を疑う人は〕如来のもろもろの智慧（五智）を疑い

信じないままで、かさねて

自力心の善根を修めることを深く信じ

自力心で称名念仏をひたすら励みます

仏智を疑う人は

閉ざされた宮殿に生まれることと同じで、仏の智慧を得ることは出来ません

あたかも母の胎内に生ずるようであり、閉ざされているので

『大経』では、牢獄にいるとたとえています

釈迦如来は弥勒菩薩に次のようにお答えになりました

疑いの心をもちながら

善行を修め、それをたのみにする人は

化土（胎生、辺地）にとどまります

仏智を疑う過失は、本当に深いものです

このことを思い知るならば

本願に従い、その過失に気づき

仏智の不思議におまかせしましょう

仏智不思議の誓願のころを

聖徳太子の導きで聞かせていただき

今は、正しく仏となることが定まっている仲間に入り

弥勒菩薩とおなじ身となりました

【八四首】

救世観音大菩薩

聖徳皇と示現して

多々のごとくすてずして

阿摩のごとくにそひたまふ

【九十首】

和国の教主聖徳皇

広大恩徳謝しがたし

一心に帰命したてまつり

奉讃不退ならしめよ

【九四首】

浄土真宗に帰すれども

真実の心はありがたし

虚仮不実のわが身にて

清浄の心もさらになし

【九五首】

外儀のすがたはひとごと

賢善精進現ぜしむ

貧瞋邪偽おほきゆゑ

奸詐ももはし身にみり

【九七首】

無慚無愧のこの身にて

まことのころはなけれど

弥陀の回向の御名なれば

功德は十方にみられたまふ

【九八首】

小慈小悲もなき身にて

有情利益はおもふまじ

如来の願船いまさずは

苦海をいかでかわたるべき

【意 訳】

救世観音菩薩は

聖徳太子としてその身を示され

父のように人々をおさめとり

母のように人々によりそってくださっています

和国（日本）の教主である聖徳太子の

はかり知ることの出来ないご恩は、謝しても謝しきれません

太子のお勧めに一心に従い

怠ることなく讃仰いたしましょう

浄土真宗のみ教えに帰入していますが

真実の心はありません

うそいつわり、不真実にみちたわが身ですので

清浄の心も全くありません

人はみな、外面の行いを整え

賢善精進の人らしく見せてはいますが

むさぼり、いかり、よこしま、いつわりが多く

それゆえに他の人々をだますような心に満ち満ちています

人にも天にも恥る心をもたぬ私ですので

真実心ももちません

阿弥陀如来より回向くださる名号ですから「それを聞き称

えるところ」十方に如来の徳は満ちあふれます「あらゆる

人々にお念仏のみ教えはゆきわたります」

小悲さえもたぬ身ですので

人々を利益し、み教えに導くなどとは思ふことさえ出来ません

如来の願船がなければ／どうして生死の苦海を渡ることが出来

ましようか「如来の願船に乗るからこそ生死の苦海を渡ること

が出来ます」

【九九首】

蛇蝎奸詐のこころにて

自力修善はかなふまじ

如来の回向をたのまでは

無慚無愧にてはてぞせん

(一〇〇首)

五濁増のしるしには

この世の道俗ことごとく

外儀は仏教のすがたにて

内心外道を帰敬せり

(一〇一首)

かなしきかなや道俗の

良時・吉日えらばしめ

天神・地祀とあがめつつ

ト占祭祀つとめとす

(一〇六首)

無戒名字の比立なれど

末法濁世の世となりて

舍利弗・目連にひとしくて

供養恭敬をすすめしむ

(一一〇首)

善光寺の如来の

われらをあはれみましまして

なにはのうらにきたります

御名をもしらぬ守屋にて

(一一一首)

そのときほとほりけとまうしける

疫癘あるいはこのゆゑと

守屋がたぐひはみなともに

ほとほりけとぞまうしける

【意 訳】

へびやサソリのように偽りの心に満ちています／とてもこの  
ような心で自らの力を頼りにして善根を積み上げても、純  
粋な行を完成させることは出来ません

如来より回向くださる念仏をよりどころにしなければ  
恥しらずの身のままで人生を終えることとなります

五濁がさらに濁りを増す証拠には

この世の出家も在家もすべて

外形は仏教徒のすがたをしているが

内心は外道（迷信）を敬っている

悲しいことであるが出家も在家も

日時の良し悪し・吉凶を選び

天神・地神を崇拜して「除災招福を求め」

うらないや祭祀を勤めとして「外道に帰して」いる

戒を破り名ばかりの僧であっても

末法濁世の世においては

舍利弗や目連と同じように「尊い人である」

供養し恭敬せよと「諸経典では」勧めている

善光寺のご本尊の阿弥陀如来は

日本のわれらを憐れみたまひ

「百濟より」難波の浦に到来されました

物部守屋はその御名さえも知りませんでした

それよえ、そのとき「ほとほりけ」（熱気・熱病の神）

と申しました。当時、流行した伝染病は、この仏を崇  
めたためと主張して

守屋の一族の人々は

「ほとほりけ」と申しました

親鸞八十八歳御筆

「獲」の字は、因位の時きうるを獲といふ。「得」の字は、果位の時きにいたりてうることを得といふなり。「名」の字は、果位の時きのなを名といふ。「号」の字は、果位の時きのなを号といふ。「自然」といふは、「自」は、おのずからといふ、行者のはからいにあらず。しからしむといふことばなり。「然」といふは、しからしむことば、行者のはからひにあらず、如来のちかひにてあるがゆゑに。「法爾」といふは、如来の御ちかひなるがゆゑに、しからしむを法爾といふ。この法爾は、御ちかひなりけるゆゑに、すべて行者のはからひなきをもちて、このゆゑに他力には義なきを義とするとしるべきなり。

「自然」といふは、もとよりしからしむるといふことばなり。弥陀仏の御ちかひのもとより行者のはからひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひて、むかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんともあし

この文は親鸞聖人八十八歳の御筆跡です。

「獲」の字は、仏がまだ菩薩の因の位の時きうることを獲といひます。「得」の字は、仏となつた果位の時きうることを得といひます。

「名」の字は因の位の時きの名をいひます。「号」の字は、果の位の時きの名を号といひます。

「自然」といふのは、「自」はおのずからという意味で、念仏者があれこれ手だてをつくすことではありません。そのまま成り立たしめていふ言葉です。

「然」といふのは、そのまま成り立たしめていふ言葉で、念仏者があれこれ手だてをつくすことではありません。阿弥陀如来の誓いによつて成り立たしめられているといふことだからです。

「法爾」といふのは、阿弥陀如来のお誓いのはたらきによるから、そのように成り立たしめていふことを法爾といひます。

この法爾は、阿弥陀如来のお誓いでありますから、すべての念仏者は手だてをあれこれつくすのではなく、それゆゑに、本願力は他力であり、思いや言葉ではあらわすことが出来ないことを本義とすると知るべきでしょう。

「自然」といふのは、あらゆるものをそのように成り立たしめていふという言葉です。

阿弥陀仏のお誓いは、本来、念仏者があれこれ手だてをつくすにすぎません。

念仏者の方で、これでよいだろうか、悪いのではないだろうか、あれこれ思いをめぐらすのではなく、

「全く阿弥陀如来の手だてのよることを」

自然といふのです。聞きなっています。

阿弥陀如来の誓いの内容は、

「最高のさとりのおんにならしめたい」

と誓ってくださいています。

からんともおもはぬを、自然とは申すぞとききて候ふ。ちかひのやうは、「無上仏にならしめん」と誓ひたまへるなり。無上仏と申すは、かたちもなくまします。かたちもましまさぬゆゑに、自然とは申すなり。かたちましますとしめすときは、無上涅槃とは申さず。かたちもましまさぬやうをしらせんとて、はじめに弥陀仏とぞききならひて候ふ。弥陀仏は自然のやうをしらせんれうなり。この道理をこころえるうちには、この自然のことは、つねにさたすべきにはあらざるなり。つねに自然をさたせば、義なき義とすといふことは、なほ義のあるべし。これは仏智の不思議にてあるなり。

(一一五首)

よしあしの文字をしらぬいとほみな

まことのころなりけるを

善悪の字しりがほほ

おほそらごとのかたらなり

(一一六首)

是非しらず邪正もわかぬ

このみなり

小慈小悲もなければも

名利に人師をこのむなり

「最高のさとの仏」

と言うのは、形であらわすことはできません。形であらわすことができないので自然といえます。

逆にこのような形ですとあらわす時は、最高のさとりではありません。形をこえ、形ではあらわすことのできない内容を、わかりやすくわれわれに知らせてくださるために、阿弥陀仏とられたと聞きならつています。

このように阿弥陀仏は、自然の内容を知らせようとする手だてであります。

このような道理を心得た後は、この自然のことは、つねにこれ論ずべきではありません。

つねに自然についてあれこれ論ずれば、思いや言葉ではあらわすことが出来ないという本義について、あれこれ手だてをつくして思いや言葉であらわし、それにとらわれることになりました。

この自然法爾ということ、仏さまの智慧が、思いや言葉、すべてのとらわれをこえていることをあらわします。

善や悪の文字も知らぬ人が

偽りのないまことの心の人であります

かえって善や悪の文字を知る「賢者ぶつている」人は大偽りのすがたをしています

是と非、邪と生のすじ道もわからぬ

この身です

わずかな慈悲心さえないのに

名誉や利益を求め、人の師となることを好んでいます